

十二年七月三十一日

元山口藩士族脱籍永有隣ノ犯罪ヲ處刑ス

司法省伺

元山口藩士族脱籍富永有隣儀犯罪處分方ノ儀ニ付
別紙ノ通掛リ玉乃判事ヨリ申出候間何分ノ御指揮
有之度此段及上申候也

廿二年六月廿三日
司法

伺通 十二年七月三十一日

大審院上申 司法省宛

元山口藩士族脱籍富永有隣國事犯一件ニ付審問ヲ
遂ケ候處別紙口供ノ通結審相成候ニ付別紙擬律ノ
如ク處分致シ可然哉別紙書類相添此段上申候也
二十

擬律案

明治二年舊山口藩ニ於テ兵制改革ノ際銳武隊始諸
隊ノ兵藩廳ノ處置其當ヲ得ストレ沸騰ニ及ヒレ時
其隊兵ヲ指揮レ藩兵ト抗戦スルニ至ラレメレ者
除族ノ上

禁獄終身

富永有隣

元山口藩士族脱藩富永有隣口供

文政四巳年十一月生
五十七年五月

明治十二年三月廿四日申立

第一條 自分儀舊山口藩士ニテ家禄貳拾五石ヲ賜
ハリタリ

第二條 父ハ富永七郎右衛門ト稱レタリ自分ハ其
嫡子ナリ

第三條 自分儀妻ヲ娶リレフナキニ付子供ハ無之

因テ新助ト申者ヲ養子ニ致レタリ

第四條 自分最初ノ住居ハ周防國吉敷郡小郡又ハ
陶村等ニ有之タレト明治二年前頃ヨリ宿井村ニ
轉居レタリ

第五條 自分ハ銳武隊ニアリタリ然レトモ素ヨリ
其役員ニ無之ニ付別ニ職掌トラハ無之專ラ隊中
ノ者共ニ文學ノ教授ヲ致レ居リタリ

第六條 銳武隊ノ隊長ハ堅田大和軍監ハ飯田竹次
郎書記ハ岩佐清三郎村田右一郎等ニテアリテナ
リ

第七條 自分カ月俸ハ大凡壹圓七拾五錢位宛ヲ貰
ヒ受ケタリ又隊長ノ月俸ハ三拾圓位軍監書記ノ
月俸ハ大凡四圓位ニテアリテナリ

第八條

自分カ月俸ハ前條ノ如ク少カニテアリタ
レ凡自分ハ月俸ノ外ニ書生杯ヨリ束脩等ヲ受ケ
レコアル故金ハ相應ニ所持セレナリ

第九條

先年攘夷ノ節高杉晋作ノ策ニテ壯年血氣
ノ無賴子弟ヲ募リ兵隊ヲ編制セリ即チ奇兵隊膺
懲隊銳武隊攘夷隊整武隊ノ六隊ニシテ五百人ヲ
以テ一隊トナシ六隊合セテ三千人ナリ然ルニ明
治二年冬中山田市之先東京ヨリ山口ハ歸リ岩佐
清三郎ニ話シテ云今般御親兵ヲ編制セネハナラ
ヌニ付山口藩ノ兵ヲ出スヘシト木戸カ申サレタ
ルニ付奇兵隊初メ六隊ヲ一隊トナスヘシ尤御親
兵トスルニハ斷髮洋服ニ變スヘシト右ノ趣ヲ岩
佐ヨリ自分ヘ申聞ケタリ

第十條

自分右ノ話シテ岩佐ヨリ承リタリ因テ考
フルニ抑國ニハ自ラ國故ト云フモノアリ隊ニハ
自ラ隊故ト云フモノアリ然ルラ今六隊ヲ合レ一
隊ト為スハ固ヨリ人情ニ戾リタルヲナレハ到底
諸隊ノ惑亂ヲ生スル基本トナルヘキ儀ニ付六隊
ヲ合一ニシテ以テ其隊故ヲ變更スルハ決シテ宜シ
カラス抑徳川家康カ天下ヲ掌握セレニ當テモ甲
斐ヲ治ムルニ於テハ武田信玄ノ舊法ヲ其儘用ヒ
毫モ損益セサリレハ則國故ノ以テ改ムヘカラサ
ルノ確証ナリ又清ノ太祖ノ如キハ支那全國ノ人
民ヲ辦髮トナシ大ニ國故ヲ改メタリ是ヲ以テ支
那ハ漸ク委靡振ハサルニ至ル是即チ國故ヲ改メ
レノ不可ナル實例ナリ然レ凡是非御親兵ヲ出

スニ付六隊ノ兵ヲ出サネハナラヌトノナラハ
一旦六隊ヲ盡ク解散シ更ニ其中ヨリ召募セラ改
メラ隊ト為スニ如カス右ニ付其旨趣ヲ藩廳ニ
至リ申立ヨト自分ヨリ岩佐ニ申聞ケタリ

第十一條 岩佐ハ自分ノ論ヲ至當ト思ヒ山口ニ至
リ其旨ヲ藩廳ニ申立タレバ藩廳ニ於テハ一向聞
入レヌトノ趣岩佐ヨリ承リタリ其後自分ヨリモ
右ノ説ヲ藩吏中ニ論シタルヲアリタレバ自分ノ
論ハ時勢ヲ知ラサルノ論ナリトテ聞入レサリシ
ナリ

第十二條 右ノ如ク自分ノ論ハ終ニ採用セラレス
シテ六隊ヲ合シ一隊トスルヲニ決シタルニ付四
十歳以上ノ者ハ悉ク除隊セラレ自分モ四十歳以

上ニ付即チ除隊ノ後チ家ニ還ルヲニ相成リ明治
二年十一月十八九日ノ比離杯ヲ酌ミシヲアリシ
ナリ

第十三條 其後自分ハ右田ニ至リ妙誓寺ノ僧ヲ訪
ヒ夫ヨリ宮市ニ至リ宿シ明治二年十二月朔日大
ヶ原ニ宿シ翌日即チ明治二年十二月二日小郡ニ
歸ラントス是岩佐ト約ヲ以テナリ途中大崎渡レ
ノ堤ノ茶店ヲ過ルノ處銳武隊ノ者共五六人出テ
抑留ス自分背シセス終ニ大道村ニ至ル際兵尾シ
来リ途中六隊ノ者脱走ノ上沸騰セシ趣ヲ告ケ
右事變ニ付テハ是非自分ニ宮市迄戻ラヌレヨト
テ即チ駕籠ヲ出シ夥多ノ兵ニテ自分ヲ要シ頻リ
ニ自分ヲ促シタルニ付勢止ムヲ得ヌ自分駕籠ニ

ヲ宮市へ戻リタリ

第十四條 然ルニ兵隊ノ脱走沸騰ニ甘山口ヨリ討
手トレラ一中隊計リノ兵来ル由ヲ聞タリ因テ自
分考ルニ今度戦争ニナリテハ甚タ宜シカラス戦
争ニ相成ラスハ追テ如何様ニ手段アルヘシト思
慮レ右脱兵中ノ最慄悍ニシテ練熟ナル兵ニ隊ヲ
選ビヒイラキハ繰出サセ且令シテ曰ク今回ハ戦
争ヲ主トスルニアラス全ク戦争ニナラス様ニ致
ス為メナレハ妄リニ我ヨリ發砲スヘカラス若シ
敵ヨリ發砲スルモ我カニ三ノ兵ヲ亡ノ後ニ至ラ
サレハ戦フヘカラスト而シテ明治二年十二月ニ
日同所ニ兵ヲ出シ右討手ノ兵ヲスクメタリ扱ヒ
イラキニ兵ヲ出シタル趣意ハ同所ノ地理タルヤ

一方ハ山一方ハ谷最モ峻隘要衝ノ地ニテ一夫之
レヲ守レハ百夫モ當ルヘカラサルノ所ナレハナ
リ

第十五條 右ノ如クヒイラキニ兵ヲ出レスクメタ
ルニ付遂ニ戦争ニハ至ラザリレナリ因テヒイラ
キノ兵ハ引揚ケ其後更ニ番兵ヲ勝取其外ニ隊兵
兵ヨリ配置シタル趣ナリ

第十六條 自分ハ其頃宮市ノ天満宮ノ社家武満某
方ニ寓シ又ハ陶村又ハ大道或ハ右田等ニ滞在シ
タリ

第十七條 勝坂ニ番兵ヲ置キレ節毛利内匠山口ヨ
リ宮市ノ方ニ来ラントラ勝坂ニ参リシニ兵士等
毛利内匠ヲ通行セシメス遂返シタル由自分追テ

承り毛利内匠ハ毛利家ノ一門ニテ公子モ同様ナ
リ然ルヲ兵士等粗暴ノ措置ニ及ヒシハ甚以宜シ
カラサルヲナリシト兵士ヲ誠メタリ其頃兵士ノ
持論ハ斷髮洋服等洋風ニ變スルヲ不平ヲ抱キ
レノミナラス舊長官ハ何レモ私意ヲ挟ミ然ラ
ノ所置其當ヲ失シタルヲ憤怨シ舊長官ニ屠腹セ
レムヘレト一同激論ヲ主張セリ

第十八條 其頃紀州浪人久保無二三ヨリ松原音三
瀧彌太郎ノ兩人山口ヨリ来リタル旨承リタルニ
付自分松原音三ヲ訪シテヲ慫慂ス而シテ肯ンセ
ス後ニ呼ニ来リ而シテ至ル是ヨリ音三ハ大仙房
へ来リ其後三田尻へ移レ後ニ山口へ取纏メタリ
第十九條 毛利内匠ノ諸隊總督トナルヤ松原音三

ハ其參謀タリ而シテ松原ヨリ自分ニ申聞ルニ山
口ヨリ當地ニ討手ハ差向ケサルトノヲニ相成リ
タルニ付安心ノ為メ自分等ニ山口ニ至リ其趣一
應見定メ兵士ニ安心サセ異ヨトノヲニ付他ノ者
ハ本道ヨリ山口ニ至ルヲニ談レ自分ハ小郡ノ方
ヲ廻リ山口ニ至レトノヲニテ出發セレ途中番所
ニ於テ兵士等自分カ山口ニ至ルヲ差留メタルニ
付自分一應信光寺ト云寺へ兵士ヲ呼集メ兵士カ
自分ヲ差留メレ趣意ヲ尋ネ且自分カ山口へ至ル
ノ趣意ヲ論シ其末終ニ山口ニ至リ差ヲ探偵モセ
ス凡ソ容子ハかりタルヲナレハナリ而シテ何等
ノ異状モ無之由ヲ宮市ニ歸リ其顛末ヲ祭士等ニ
告ケタリ然ルニ其節誰歟壹人山口ノ事情ヲ探偵

セレニ中々無事ニハアラス依テ討手ヲ差向ケサ
ルトノコトハ輒ク信シ難シト申述ヘ自カ申聞ケ
シ旨ヲ疑ヒタリ右疑ヲ生セシメシハ松茸山寺院
ノ僧頗ル奸物ナル者兇徒煽動シ自カヲ刺殺セシ
メントシタルニ出タル由ナリシナリ其後兵士等
其僧ノ奸ナルヲ知り其徒四五人ヲ海濱ヘ連レ出
シ斬首セシ趣ナリ

第二十條 其頃國司信濃ノ家来佐々木祥一郎ナル
者能ク入テ煽動レタリ干城隊カ御館ニ守衛ノ為
メ入ラントセシ節モ佐々木ハ干城隊カ御館ニ入
ルハ宜シカラサル旨申シタル由承リタルニ付自
分佐々木方ニ参リ説諭致シタルコトモアリタリ其
後ハ佐々木トハ疎クナリタリ

第二十一條 其頃脱隊説諭ノ為メ長門守殿三田尻
ヘ出張セラレタリ柏村某隨從万事盡力セリ其節
兵士等ハ皆舊長官ノ非ヲ數ソヘ誰ハ屠腹ニ處ス
ヘク誰ハ遠嶋ニ處スヘト一々其刑名ヲ記シ長
門守殿ヘ呈レタリ然ルニ自分ニ於テハ其處置ハ
固ヨリ主君ノ權内ニアルトニテ我々カ議スルハ
宜シカラサルコト存シタルニ付固ヨリ其刑名等
ハ定メス只舊長官ノ人名ノミヲ記シ差出シ罪ノ
當否ハ上ノ御處分ト申上ケタリ

第二十二條 其後舊長官ハ其處置不宜旨ヲ以テ一
旦款ヘ謹慎被申付其末長府ヘ脱シタリ而シテ木
戸カ命レタルコトナランカ長府ノ兵ヲ募リ山口ニ
向ヒ柳井田関門マテ寄セタリレトミヌ長府ノ兵

ハ此時ハ吉田ニ奇兵隊ノ兵ト對壘ス有隣ニ諭シ
引シムヘシトハ此奇兵隊ノ兵ナリ

第二十三條 然ルニ長府ノ兵ヲ小郡関門ニテ拒マ
ントセシハ長官ノ寄手敗走ノ後ヲナリ其節ハ隊
長堅田大和專ヲ指揮シテ自分ハ別ニ指揮シタル
ヲナレ其際外ニ百姓一揆起リテ是ヲ鎮壓ノ為メ
吉田ニ出張シ居タリシハ奇兵隊ノ兵ナリ即チ有
隣ノ命ヲ受テ引揚シムル兵ノヲナリ

第二十四條 右ノ事件以前ヨリ自分ハ奇兵隊ノ者
トハ甚不和ニテ交際セサリシ處自分カヲヲ誤シ
タル者アリテ自分ヲ刺殺セントスルノ勢アルニ
付一旦避クヘシト自分ニ心付ケシ者アリ又其頃
奇兵隊ノ長官ナリレカ自分ヲ姦賊ト罵詈セシ者

アリシニ因リ自分ニモ兎ニ角此場ハ避ケサルハ
カラスト考ヘ終ニ脱走ニ心ヲ決シタリ

第二十五條 其節自分ニ隨ヒ共ニ脱セント云フ者
三四名アリ俱ニ小郡ヲ登シ晝九ツ時頃山口ヘ至
リ夫ヨリハツ時頃徳地ノ方ニ脱シタリ此時三四
名共ニセント云テ尾レ来リタリ

第二十六條 徳地ノ山中ニテ夜ニ入り折柄暗夜ニ
際シ路ヲ失ヒタルヨリ自分ハ誤テ三百間程モ谷
底ニ轉ヒ落テ其節腰ニ下テ置キシ軍用金貳分金
ニテ五六百圓ヲ遺失セリ併シナカラ懐中セシ百
貳拾圓程ノ金ハ幸ニ失ハサリシナリ全体戦争
ノ時ニハ腰ニ金ヲ帶ヒ居有功ノ者ニハ即坐ノ賞
美トシテ右一擲ミツハ遺ハスヲ其例アリテ隊兵

ヨリ吳タリ尤一掴ミハ大概拾圓又ハ拾圓五拾錢
位ニアリレナリ

第二十七條 夫ヨリ土人ヲ頼ミ路按内トシテ藝州
路ニ趣キ終ニ金比羅ニ渡海レ尚土州ニ至リタリ
右土州ニ至リレハ客堂公ハ毛利家ト御親戚ノ御
間柄ニ付脱隊ノ情實ヲ述ハ至當ノ御取扱ヲ願ハ
シト存レタレハナリ

右ノ通相違無御坐候也 十二年四月廿九日

明治十二年三月廿五日午前申立

第二十八條 太樂源太郎ニ關係セシアルヤト御
訊問アルニ自分ハ更ニ關係セシナシ一体源太
郎ハ兎玉若狹ノ家来ナルカ源太郎カ門人ノ内ニ
大村益次郎殺害一件ニ關係セシ者アリラ夫カ為

メ源太郎ハ其頃主人預ケニナリ居ルト聞タリ

第二十九條 自分カ太樂源太郎ニ面會セレハ明治

元年前ニラ爾来面會レタルナレ其後源太郎ハ
柳川ニラ新ラレタリト云フヲ聞タルマナリ

第三十條 山口ニラ寄組ノ者カ集會ヒレ節兎玉小

民部自分ノ門ト熊谷式部ト云者ヨリ太樂源太郎

ヲ脱隊ノ方ハ連レ越ス趣ト云シニ付自分ヨリ彼
レハ主人預ケノ者ユハ決シテ其様ナルハナラ
ストヲ話シタリ

第三十一條 自分カ土州ニ居リレ節清水進ト云者

ニ面會シタルナルヤト御尋問アレニ自分ハ更
ニ面會セシナク且姓名サヘモ承ヲタルナキ
ナリ

第三十二條 明治三年二月九日自分山口ニ在リシ

節赤川惣助来リ隊ノ話杯ヲナシ居ル際松原音三
来リ云板下筋ニ居ル十六隊脱^ル引揚ケネハ
ラス右ハ長府ノ兵ト戦ヲナシテハ濟マサルニ付
何レヘカ連辰レタシト自分云足下ノ内相談ニテ
ハ不條理ナリ君命ヲ以テ自分ニ任セラル、^ナ
レハ何モ仔細ナシト音三左レハ君命ヲ奉^ル来ル
ヘシト而レテ立出タリシカ果シテ夜五ツ時過
頃音三君命ヲ帶^リ来リシニ付自分直^ニ山口ヲ
發シ小郡^{山口ヨリ小郡ニ出タリシカ}駕籠人足、
来ル^ト遲延ナルニ付小郡ノ宿茶屋ニ待合居タリ
而シテ飲酒セシ内^{ハツ半時}早馬ニテ使役ノ者来
リシニ付自分ヨリ何事ナルヤト問タル處使役云

只今夜襲ヲナストノナリト因テ自分ハ使役ノ

馬ニ乘リ名田島大道寺ヘ行ントセシ處藪陰ヨリ

自分ヲ目掛ケ一二發砲撃セリ因テ自分危難ナリ

ト思考セレニ付直^ニ小郡驛ヨリ西ニ當ル山ノ

手ヘ引揚ケ夫ヨリ兵ヲ率テ關門内ヘ入リタル處

而關門砲聲頻リニシテ己ニ夜襲ノ兵ニ關門ヲ乘

取ラレタルト見ヘ關ヲ揚ゲタルヲ聞タリ夫ヨリ

自分ハ街道ニ出タルカ新町ニテ戦アリシナリ

第三十三條 其前野村カ岩國ヘ兵ヲ募リニ至リタ

ルト承リシニ付山口ニテハ何ヲスルカト存シ居

タル處木戸モ亦長府ノ兵ヲ募リタルト云フコトヲ

承リタリ

第三十四條 明治三年二月九日戦ノ節小郡驛ノ御

茶屋ト唱フル處ニ木戸其外本陣ヲ取リ居リタリ
レカ下筋ヨリ引揚タル十六小隊ノ者共カ其本陣
ハ押掛ケタルニ付木戸等ハ斬ヤクニレラ免カレ
タルヲアリ跡ニラ承レハ其節木戸ハ縣令カ平日
微行杯ノ節通行セシ拔ケ宛ヨリ辛フシテ脱シタ
リトノ由ナリ但最初松原音三ヨリ自分カ下筋ハ
行ク様ニ取計ヒレハ畢竟自分ヲシテ山口ヲ出ラ
レハルノ策ニラモアリシナラント其後考付キレ
ナリ

第三十五條 其日セツ時頃寄手ノ兵松崩レニナリ
タル際關門ヘ来リ馬上ニラ富永ト呼フ者アリ而
シテ其者云今日ヨリ追討ヲセネハナラス因テ兵
ヲ貸吳レヨト自分云兵ハアラサルナリ自分三小
隊計リハ

兵ハアリタレニ態先方云是非貸吳レヨト兩度迄
ト此ヲ申セシナリ
来リ云三度目ニ二小隊ト大砲一門ヲ貸渡スベシ
ト云タレニ最早遅刻ニラ機ヲ失ヒ其事ハ止タリ

第三十六條 此日松崩レニハナリタレニ兵士共申
合セ各所ニ兵ヲ配賦セネハナラストノ申合セニ
テ各要地ニ兵ヲ置キタリ夫ヨリ自分ハ堅田大和
ノ宿所ニ至リタル處大和ハ關門外ヘ出タル後未
タ行衛カラストノヲナリシナリ

第三十七條 古堅田大和ハ長門守殿ノ姪ニ當ル者
ニ付自分甚心配シタリレカ大和ハ戰地ヲ脱シ小
郡町家ニ至リ長持ノ中ニ隠レ居タリト承リレカ
後ニ歸リタリ其夜千城隊ノ諫早七郎来リ云今長
府ノ兵カ登ルニ付是非關門ヨリ分配シ居ル兵ヲ

引取ラセヌレヨト自分云己ニ戦ヲサセル様ノ
ヲ仕出シナカラ今之レヲ引取ラスハ甚難カル
ヘレ拙者ノ考ニラハ尼下居命ヲ奉レテ来ルヘシ
居命サヘアレハ自カ必説諭レヲ引取ラスヘシト
是ニ於テ諫早直ニ山口ニ引返シタリシカ間モ
ナク居命ヲ奉レ来リタルニ自分即テ頭カノ者
ヲ呼寄セ百万説諭スレテ承諾セス自分云長府ノ
兵ハ御守衛ノ為メ登ルナレハ決シテ通行ヲ阻
ムヘカラス汝等若シ承諾セサレハ拙者ハ唯死
ルノミト是ニ於テ兵士等其説諭ニ服従レタルニ
付一同山口ニ引取ラセ此日三年二月十日ノ晝九
ツ時頃ニテモアリツク
是ヨリ後千人隊箇屋へ行脱走ス自分ハ跡ヨク山
口ニ至リタリ二十三条同四
條ノ間ニ當ル

第三十八條

自分山口ノ旅宿ニ居タル處千城隊ノ
者来リ千人隊練場へ行カンカト云ヒレニ自分
千城隊ト同ク千人隊ヘ至リシ處振武隊ノ者カ銃
器杯ヲ納メ居タリ其節自分ヲ見テ此奸物メト云
タル者アリトニ付自分モ怒氣ヲ生レタリ且其際
我兵士脱兵中ニ於テ銃器ハ納メスト云者杯モアリ
テ混雜セレニ付自分ハ千人隊ヲ出掛ントセレニ
岡部富太郎来リ云銃器ヲ納メネハナラサルニ付
是下何トカレテ納メサセテ呉レヨト自分即テ兵
士ヲ説諭シ夫ヨリ市中へ出ントスル際売人アリ
テ自分ヲ呼ビ且云何ンテモ先生ヲ殺スト云説
アリ付テハ先生何レヘカ避ケルヘシト其節自分ハ
何ニモ恐ルヘキトトハ存セサレテ己ニ千人隊ニ

ヲ自分ヲ奸物ト云タル者モアリシ位ニ付或ハ災ニ係ルモ計リ難ク先ツ此地ヲ避ルハ禮ナリト思考シ終ニ脱走ニ決意シタルナリ

第三十九條 自分千人隊ヲ出シ節懐中ノ金ハ百貳拾兩計リナリシカ腰ニ着ケタル金ハ徳地ノ山中ニテ轉々落ケタル節遺失セシニ付腕ト覺ヘサルナリ但シ右百貳拾兩ハ自分ノ所持金ナレハ腰ニ着ケレ金ハ兵士ノ賞美ニ遣ス為メ銳武隊ノ會計方ヨリ預リ置キレ軍用金ノ外ナリ

右ノ通相違無御坐候也十二年四月廿九日

明治十二年三月廿五日午後申立

第四十條 自分山口ヲ脱走セシ節ハ最初「テノ」デセシヨリ嚴島ニ渡リ夫ヨリ能見島へ渡リ夫ヨリ多

度津へ渡リ多度津ヨリ陸行シテ金比羅ニ至リ夫ヨリ川ノ井通リテ経テ土佐ニ至リタルナリ

第四十一條 右土佐ニ至リタル手續ハ最初金比羅

町ニ至リシ節會議所四國ノ各藩々會同シテ至

リ高知縣ノ島村次郎會議所ノニ面會シテ山口藩

内亂ノ事情ヲ話シ且拙者ハ御隠居容堂公へ面謁

シテ何ハ國事ノ整フ様ニ願度旁来リタル趣ヲ申

述タル處明治二年高知藩ヨリ長州ニ使者ヲ差越

ルト存シ居リ島村承諾シ然レハ高知へ至ルヘレト

申スニ付即チ高知ニ至リタルナリ但此時桑原讓

ト外ニ足輕体ノ者走人同道ニテ高知ノ城下ナル

永國寺へ至リ此時櫻花ヲ觀タルニ付必ス夫ヨリ

一ノ宮ノ何某方ヘカ移リタリ其節自分變名ハ失

念レタレトモ松本何某トカ名衆リタル様存スル
ナリ而シテ自カ面會シタルモノハ吉永龍吉乾
作七等ナリ

第四十二條 右會議所へ至リタルハ明治三年二月

中旬頃ナリ 此時ハ自カ本名富其節島村次郎ハ山

口内亂ノ事情モ既ニ承知シ居タル様子ニテアリ

レナリ右ハ脱兵ノ者カ自カヨリ先キニ多人数ト

佐へ至リレユヘナルヘシ而シテ島村云此頃何某

今其姓名ヲナル者カ来リ山口政府ノ何某トカラ

斬殺シタリト云タルカ足下其者ハ承知ナルヤト

自カ云大隊中ニ其様ナル者ハ承知セス多分報國

隊長ナリノアフレモノナルヘシト爾後考フルニ

自カカ宮市ニ居ル内報國隊ノ兵カ百人計リ山口

ノ脱兵ノ内へ加入シテ吳レンカト云トノ故足

下等戦争杯ヲ仕出サントハ甚不條理ナリ此兵隊

ノ進退ニ因却シ居ルニ付逆モ其様ナ依頼ニハ應

レ難シト謝絶スヘシト云タルヲアリシニ付多分

右報國隊ノ内ノ者カ夙ク四國地へ渡リタモノト

存セシナリ

第四十三條 自カ金比羅町ニ至リシ節最初産物會

所へ立寄タル處一老人出テ云足下ハ富永居ナル

ヤト自カ云足下ハ拙者ヲ御承知ナルヤト老人云

足下ノフハ曾テ高杉ヨリ承知シタリト自カ云高

杉トハ晋作ノフナルヤト夫ヨリ互ニ國事ヲ談ス

ル内老人ヨリ島村次郎ニ通レ夫ヨリ自カ島村ニ

面會シテ國事ヲ談シタル處島村モ同論ナリレユ

ハ島村承知ノ上直ニ高知ハ至リタル次第ナリ但
右老人ハ多分真言宗ノ僧ナラント今日考居ルナ
リ

第四十四條 吉田松陰ノ著述セシ孫子標註ト云書
アリ其書中ニ富永有隣ト謀リ云々ノ文アリ右ヲ
一覽セシニヤ金比羅ヨリ同道セシ足輕体ノ者金
比羅町ニテ自分ニ請テ云孫子ニ御異説アラハ何
卒書示シ吳ヨト又其事ヲ自分ヨリ吉本龍吉ニ話
シタル處吉本云拙者ヘモ書示シ吳ヨト依テ三年
三月下旬ヨリ起稿シ七月中ニ十三篇ヲ書キ終リ
八月下旬頃ニ淨書モ出来タルニ付其草稿ノ分ヲ
足輕体ノ者ニ遣シ淨書ノ分ヲ吉本ニ遣シタリ其
後承レハ吉本モ官ニ就キ又桑原モ官ニ就キタル

由ナリ

第四十五條 自分乾作セニ面會シタル節乾云拙者
ハ明治三年山口ノ動亂中高知藩ノ使者トシテ山
口ニ到リシヲアリタリト

第四十六條 自分高知ニ滞留中瀧弥太郎カ自分ヲ
探偵ニ采ルト云風聞アル趣ニ付明治三年十一月
頃一ノ宮ヲ出テ元山^{高知ノ城下ヨリ}ニ至リタリ
然ル處右探偵モ格別ノ^{十里計}モナキヨシニ付元山ニ
ハ十日計リ居リテ又高知ノ城下ヘ戻リ島村次郎
ヲ訪ヒタル處不在ノ由ニ付旅店ニ宿シタリ其節
小笠原忠五郎大石彌太郎ニ面會シタリ

第四十七條 明治三年十一月土佐ノ幡多郡ニ至リ
桑原讓ト所々同遊シ又桑原平八ニモ面會且諸方

へミ宿泊シタリ夫ヨリ豊後ニ至リ高月勝四郎尾蔵
ト云所ノ訪ヒ其末各所ニ五七日或八十日位宿
泊レ明治四年三月頃豫州へ至リタリ

第四十八條 豫州ニテ各所ヲ経歴レ大洲領ノ長濱
ニ出テ夫ヨリ豊後ノハマキニ至リ旅店ニ宿泊レ
或ハ手習師匠ノ某杯ヲ訪ヒタリ此時自分ハ川部
夫ヨリ又一時長濱ニ戻リ而シテ九州ヲ経歴シ
此時坂本大吉ト変名シ豫州ノ人別トナリ坂場ヨ
リ印鑑ヲ貰受ケレバ坂場ニテ坂ト見誤リ印
鑑ニ坂本大吉ト認メアリシニ某ノ禪寺ニテ入湯
杯ヲナレ一復ヲ送リテ其冬豫州へ歸リタリ

第四十九條 豫州ヨリ土佐ノ幡多郡ニ至リ所々遊
ヒ居タル内今度ハ朝廷ヨリ御嫌疑アルトノ由ヲ
承リタルニ付自分ハ何モ朝廷ノ御嫌疑ヲ受ル苦

モナキニ不審ナルト存シ居タレハ或ハ此地ヲ
避ル方ヨカルヘシト申者モアリレニ付明治五年
ノ春豫州ニ出テ夫ヨリ藝州ノ御手洗へ出タリ然
ルニ自分ハ「シンキング」ノ病アリレニ付御手洗ノ
石風呂ニ至リ夫ヨリ中國路ヲ経歴シテ室マヲ至
リ室ニテ舟ヲ雇ヒタル處逆風ニテ渡海スルヲ能
ハス回テ田ノ口へ舟ヲ着ケ上陸シ夫ヨリ備中ノ
玉島ヨリ舟ヲ雇ヒ又御手洗へ戻リ夫ヨリ明治五
年ノ夏豊後ニ至リタリ

第五十條 夫ヨリ鶴崎佐賀ノ関等所々遊歴シテ鶴
崎へ戻リ毛利到ヲ訪ヒタリレカ毛利ハ當時謹慎
中ニテ客ヲ謝スル由ニテ斷リテ受ケルニ付自分
ハ態々訪問シ且本名迄モ名乗リシニ面會セサル

ヲ不平ニ存シ直ケニ立去リタリ

第五十一條 明治六年別府ヨリ乗船シテ豫州ニ渡
リ所々遊歴シテ六年三月頃又豊後ニ至リ義キニ
面會セシ手習師匠某方ヲ訪ヒ夫ヨリ中國ニ出テ
備前邊ヨリ播州路ニ遊ヒ又豫州へ戻リ明治七年
一月頃土佐ノ幡多郡ニ出テ幡多郡ヨリ便船ニテ
高知ニ至リ小笠原忠五郎ニ面會シ而シテ七年中
ハ土州ヲ遊歴シ明治八年豫州ニ至リ夫ヨリ又土
佐ニ至リ而シテ又八年、暮ヨリ豫州ニ戻リ明治
九年九月迄豫州ニ宿泊シタルナリ

第五十二條 明治九年九月中豫州ヨリ土佐ニ赴カ
ントスル際長州ニテ前原一誠ノ暴舉ヲ聞其内又
肥後神風連ノ暴舉ヲ聞シニ付此ノ如キ片ハ平生

ヨリモ能ク鎮靜シテ居ラネハナラント存シ豫州
ヲ出テ九年十一月土佐ノ幡多郡ニ至リタリ

第五十三條 自分以為ク此ノ如ク人民ノ暴動ヲナ
スハ甚タ困却ノ次第ナリト是ニ於テ専ラ意ヲ鎮
撫論ニ決シ過妄名簿ト云モノヲ作り我同論ノ者
ヲシテ姓名ヲ記載セシムル積リノ處爾來過妄論
ニ服従スルモノ追々出来己ニ名簿ハ記載シタル
名前モ二十名計リニ及ヒタレ其名簿ハ今何レ
ハ差置シヤ覺ヘサルナリ但自分カ右幡多郡ニ至
リシハ即テ過妄論ヲ以テ壯士ヲ鎮撫スルノ旨意
ナリシナリ

右ノ通相違無御坐候也 十二年四月廿九日

明治十二年三月廿六日中立

第五十四條 土州ノ人情ハ百姓ニ至ルマラモ戦争ヲ為レ功ヲ立テ名ヲ揚ケント云フノ風ニテ全体殺伐争鬭ヲ好ムノ習俗ハ關犬ノ流行スル一事ヲ以テモ知ルヘシ抑關犬ヲ好ムノ情ヲ推セハ獨ト云フ字ニナルナリ大學ニ君子ノ慎ミハ獨ヲ其ストアルモ其意ニテ獨ノ字ノ意ハ即チ鬭フナリ其徴ハ説文ニ犬相鬭フヲ獨ト云フトアリテ君子ノ慎ムヘキハ鬭ヲ目當トスルナリ君子ハ其獨ヲ慎ムト讀ハハ誤リナリ即チ土州ノ人情ハ大概此ノ如クアリシナリ

第五十五條 自予ニ於テ右ノ人情ヲ知り居タルニ付過妄論ヲ主張レ幡多郡ニ於テ木戸武志衛ナル者ニ右過妄論ノ趣意ヲ説キタレモ同意セサリシ

ナリ

第五十六條 夫ヨリ下田ヘ出テ船ニテ高知ニ趣キ島村某ヲ訪ヒタリ是ヨリ先キ洪水暴漲シ山拔ガガシタルヲアリタリ夫ニ付土佐ヲ争亂カ起ラネハ善イカト自分懸念シタリ又伊豫ノ山ヨリ土佐ヲ望ミタルニ満面赤クシテ火ノ如ク見ヘタリ曰テツナミが起ルヒ計ルヘカラスト察シ右ノ趣ヲ島村ニ話シタリ島村曰ク此頃小供カ竹杖ヲ携ヘ軍ヲスルナラヤテゴンセト謡ヒアルクハ是レ争亂ノ前兆ナラント

第五十七條 其翌日自分安岡權馬ヲ訪ヒタルニ同人遇ハス又森新太郎ヲ訪ヒ更ニ大石彌太郎ヲ訪ヒシ處彌太郎云長州ニ於テ前原一誠ノ暴動アリ

其節三田尻邊ニ砲聲聞キタリト是時ニ自分ヨリ
土州ノ人氣ハ等閑ニ致シ置クト宜シカラス若シ
前原ノ暴動ニ應シ土州ニ於テ暴發スルモ計リ難
シ因テ何卒左様ノ事起ラス様盡力致シタレト大
石ニ申聞ケタリ然ルニ大石ヨリ土州ノ中ニテモ
何レ前原ニ應シ暴發スル如キ者ハ何處ニカアル
ヘシト相答冷笑シタリ其夜大石宅ニ一泊鎮撫論
ヲ為レタリ

第五十八條 夫ヨリ自分ハ池内某方ニ至リ岡甚杯
イタレ三四日同人宅ニ遊ヒタリ其後自分退安名
簿ト題セシモノヲ作りタリ右退安名簿ノ趣意々
ルヤ各自疲弊ヲ助ケ内ヲ和テ暴動ヲ止ルニアル
ヲ以テ之レニ同意スル者ノ姓名ヲ登記スヘキ帳

簿ナリ若シ既ニ右ニ同意セシモノ其約定ニ背キ
暴動ニ黨與セシ者アレハ假令其妻子々饑餓ニ及
フモ其財産ヲ差押ヘ本人ニ渡ス間敷トノ誓ヲ為
スヘシトノヲ記シタルモノナリ之レヲ諸人ニ
示シタルニ何レモ尤ナリト申シタリ依テ森新太
郎大石彌太郎ニ右退安論ノ草按ヲ示シ談論シタ
ルニ大石森兩人共同意シ姓名ヲ登記セリ爾後追
々同意ノ者加ハリ彼是ニ三十名モ記名シタリ右
ハ明治十年二月頃ノ事ニアリシナリ

第五十九條 其後東京山内侯ヨリ高知ヘ向ケ人心
鎮撫ノ為メ告諭ノ書翰ヲ差贈ラレ尋テ山内侯高
知ハ御下タリニナリタリ其頃自分ノ考ニモ壯年
輩ヲ其儘差置キテハ却テ暴舉スルモ計リ難キニ

付其壯年輩ヲ募リ局外中立鎮撫軍ト名ツケ西南
征討應援ノ兵ニ充テ右ニハ山内侯ノ指揮計リニ
テハ不都合ニ付別ニ親王家ヲ祭督ト仰キ西南へ
出發ノ上戰ヲ止ハル様ニ相成ルヲニ仕度右ノ趣
意ヲ山内侯ニ建白セント存スレバ自分ハ他國ノ
者ニテ不都合ニ付大石彌太郎ニ説キ同人ヨリ建
白致サスル様ニ申談シタリ然ルニ大石ハ之ヲ承
諾シタレバ彼是スル内山内侯ハ歸京セラレタル
ニ付終ニ右ノ建白ノヲハ果サ、リシナリ夫ヨリ
自分モ高知ヲ去リ明治十年六月中土州ト河州ノ
國境ナル豊永郷ト云フ山間ノ僻地ニ潜伏シ同郷
ノ少年輩ニ素讀ヲ授ケ居タリ

第六十條 自分カ豊永郷ニ參ル節景初ハ豫州ノ

方ニ參リ度心得ナリシ處西南事件ニテ高知ニモ
稍暴動ノ兆アリテ高松ノ兵カ高知ハ繰込ミシ
杯アリ右ニ付豫州ノ方ニ行クヲハ不都合故豊永
郷ニ行キ小松啓藏ト申醫者ノ方ニ寓居シタリ

第六十一條 自分高知ヲ去リレ所以ハ自分高知ニ

滯留中森池内ノ西人ヨリ自分ニ池月某ト

人ノ迷惑ヲサスル様ノヲハ云フ者自分カ履歷等

ヲ探索スル由申聞ケルニ付高知ニ居リテハ不宜

ト心得高知ヲ避ケタリ又前條ニ高知ニモ暴動ノ

兆アリト申立レハ立志社カ暴動スルモ計リ難シ

ト朝廷ヨリ嫌疑アリシ由承リシヲアリシニ曰リ

シナリ

第六十二條 自分ハ明治十年六月中豊永郷ニ至リ

明治十一年九月迄同所ニ潜伏レタリ其間明治十
年八月中阿州ニ至リ同月即チ八月廿六日ニ阿州
ヨリ豊永郷ニ戻リタリ其日薄暮ニ非常ノ光リ東
方ヨリ發シ西方ニ廻リ如何ニモ變事ト思ヒタリ
其夜モ終宵光リ尚翌日モ同様ニテ餘リ異變ト存
シ丙午ノ日自分策レタルニ屯ノ五ヲ得タリ依テ
考フルニ屯難ト心得タリ

第六十三條 自分豊永郷ニ潜伏中小松啓藏小笠原
誠ノ進小笠原誠之進ハ高知藩ノ頃ヨリ阿州境ノ
赤歸ノ為メニ藩ヨリ中付ヲレ豊永郷ニ居
由ノ等ト鎮撫論ヲ為シタリ全縣豊永郷ニハ文字
アル者ハ壹人モナク四書ノ素讀位ニテモ出采ル
モノハ實ニ稀ナレ其質朴誠實ノ人氣ニ付鎮撫ノ
論ヲ為スニハ至極宜敷ト存シ談論ニ及ヒタリ其

節小松啓藏曰ク立志社ハ其ヲ舉ルト云フ由巡查
ヨリ承リタリト依テ其巡查ヲモ鎮撫論ノ同意ニ
引入ントテ巡查巡查ハ一村ヲ呼ビニ遣ハレタル
吏人ナリ處酒ニ酔ヒ居リシトテ來ラサリシナリ

第六十四條 其頃吉川監物カ土州ニ來リ豊永郷ニ
潜伏シテ其ヲ舉ルノ企ヲ為ス由道路ノ風説アリ
能ク聞知セハ吉川監物トハ自分自分ハ其頃居谷
修一即チ變名シ
リノ一ヲ指レタルニ相違アルマシトノ一ヲ明治
十一年四月頃小松啓藏姉ヨリ承リタリ

第六十五條 明治十一年八月廿八日自分豊永郷ニ
於テ巡查ニ拘引セラレ夫ヨリ高知ヘ護送相成リ
獄ニ下サレタリ

右ノ通相違無御坐候也 十二年四月廿九日

明治十二年三月廿七日申立

第六十六條 明治十年鹿兒島暴舉、際自分カ局外
中立ニテ事ヲナサントセシハ政府ニ對シ人民ノ
為ス可ラサルヲトノ旨昨日御詰問アリレニ付昨
夜熟考スルニ仰聞ケノ趣御尤千万ト存スルナリ
サレヒ自分ノ旨意ニ於テハ當時賊ヨリ肥後城ノ
困ミヲ拔カル、キハ忽テ馬關へ突出スルハ疑ナ
キニ付自分局外ニテ一時止戦ノ策ヲ旋ラシ而シ
テ西郷隆盛ニ對シ何カ政府へ申立度事實アレハ
取次ヲナシ遣ハスヘキ旨説諭ニ及ヒ西郷ニ於テ
其申立ル處相當ノヲアレハ自分ヨリ政府へ申立
肥後ノ困ヲモ解カセ人民ノ慘毒ヲ免カレシムル
ノ旨意ニテアリレナリ

第六十七條 自分ハ最初ヨリ西郷隆盛ノ心術ニ於

テ甚不同意ノヲアリレナリ其次第ハ戊辰ノ役畢
リ西郷カ歸藩スル際故本戸顧問故大村英部大輔
カ之レヲ止メタルニ西郷ニ於テハドウテ復元龜
天正ニナリマストテ去リタリト云フテ其砌櫻井
慎平軍謀局判事カ自分ハ語リタルヲアリレニ付自分
櫻井ニ對シ夫ハ屹度詰問エテ差止ムヘキヲナル
ニト云シフアリタリ其以來ハ自分甚々西郷ヲ疑
ヒ居タルニ付決レテ西郷ヲ助クルノ心得ハナカ
リレナリ然レニ局外中立ノ論ハ却テ賊ヲ庇蔭ス
ルトノ御詰問ハ御尤ナレヒ自分ハ只肥後ノ困ヲ
解テ一時兵隊中ノクツロキヲ付ル積リノ旨意ニ
止ルナリ尤西郷ニ於テ自分ノ説ニ從カハサル片

ハ勿論直ニ之レヲ討スルノ積リナリシナリ

第六十八條 自分カ山口ヲ脱シテ變名セシハ變名セサレハ土州へ入ルヲ得ストノヲニ付テナリ且ハ畢竟捕縛ヲ避ンカ為メニナレタルナリ左レハ其變名セシハ今更宜シカラサルヲト存スルナリ

第六十九條 自分ハ政府ノ探偵ニ係リ居ルト云フハ曾テ承知セサレ氏自分カ豫州ノ巖尾ニ居ル節何ノカクシウトカ申ス者ヨリ先生ヲ土州ニテ探偵レ居ルト云タルヲアリ夫ヨリ土州へ至リタル後モ自分ヲ探偵スル者アルト云説ヲ兩三度承リタルヲアリシナリ

第七十條 明治二年十二月二日ヒイラギニ矢ヲ出

シテ山口ノ矢ヲスクメタルハ相違ナキナリ右ハ山口政府ノ命令ヲ受ケ出タル矢トハ心得サルニ付一時ノ權畧ヲ以テナレタルナリ但其節奇矢隊三小隊ヲ出レタルハ強矢ニアラサレハウロタユルヲアルユヘ即テ強矢ヲスグツテ出シ山口ノ矢ヲスクメタル次第ナリ

第七十一條 明治三年二月十日長府ノ矢捻崩レニナリシ後小郡邊ハ矢ヲ賦リタルハ一時ニ矢ヲ止メテハ復事ヲ發スルヤモ計リ難キニ付全ク矢氣ヲ落付ル為メニナレタルヲナリ

右ノ通相違無御坐候也 十二年四月廿九日

明治十二年三月廿八日午前申立

第七十二條 此程御審問ノ節土州ニ於テ自分カ孫

子ノ注解ヲ乾作セニ貸渡置キシ旨ヲ申立シカ右
ハ間違ニラ一旦ハ乾作セニ貸渡しタレヒ作セヨ
リハ間モナク返却シ其後自分ヨリ更ニ桑原謙ハ
貸渡しタリ右ハ今日心付キレニ付改テ申上クル
ナリ

第七十三條 先年脱隊一件ノ節自分最初ハ脱兵等
ニ要セラレ脱隊ニ加ハリタレヒ追テウツギバタ
ニ二小队ヲ繰出シ山口ノ兵ヲスクメタルハ全ク
一時ノ權道ニテ戦争ニ相ナラヌ採取計ヒタルナ
リ其後毛利内匠松原音三等来リ脱隊ヲ統轄シタ
リ

第七十四條 其後三田尻ノ御茶屋ハ長門守殿諸隊
説諭ノ為メ御出ニ相成リ其節他ノ者ヨリハ舊長

官ノ處分ニ付種々申立タレトモ自分ヨリ何モ申
立サリレナリ而シテ松原音三ヨリハ何モ申立サ
リレナリ而テ松原音三ヨリ最早山口ニ兵ハ居ラ
サルニ付安心ノ為メ山口ニ至リ其事情ヲ觀察シ
テ兵士ハ其旨申聞吳レヨトノテニ付本道ノ方ハ
ハ誰カ参ルトニ談シ自分ハ小郡ノ方ヲ廻リ山口
ニ往ク心得ニテ出發セシ處尚又大道ト云フ所ニ
テ長門守殿御出ニ相成外一統ヨリハ舊長官ノ所
罰ニ付夫々見込テ申立タルニ付銳武隊ヨリモ見
込テ申立ヘクトノヲニテ談ニ關ル然レヒ生殺ノ
權ハ固ヨリ君ニアルトニテ我々カ論議スヘキ條
理ナキ旨ヲ兵士ハ申諭シ舊長官ノ名前ノミヲ録
シ柏村某ノ取次ヲ経テ差出シタリ

第七十五條 夫ヨリ自分ハ山口へ往キ半途大村益次郎ノ後家ヲ訪ヒ益次郎ノ墓所ノヲ能々授ケオキタリ三田尻ニテ実戸備後助ニ面會シ三田尻ニアル脱隊ヲ山口へ呼寄セ御説諭有之度ト申談シ尚松原者三ニモ右ノ旨ヲ談レタリ夫ヨリ脱隊残ヲス山口へ引上ルトニ相成リ然ラ縲込ミタリ

第七十六條 其後自分内藤源吾ニ面會シタルニ源吾曰ク干城隊萩ヨリ山口ニ来リ御館ニ入ラントセシニ佐々木祥一郎ニ於テハ干城隊ヲ御館ニ入レスト拒ミタリト自分曰ク干城隊ハ固ヨリ馬廻リ等ヨリ編制セシ君側ノ兵ナルニ付此度ノ一條ニ付テハ御守衛ノ為メ御館ニ入ルハ當然ノヲナレハ祥一郎カ干城隊ヲ拒ムハ宜シカラサルニ付

其旨ヲ祥一郎ニ論スヘシト申レタルニ内藤源吾モ之ニ同意シ同人一同祥一郎方へ参リ右ノ論ニ及ヒタルニ祥一郎モ右ノ論ニ服セラ曰ク左スレハ今更自分ヨリ諸隊ヲ引カセ干城隊ヲ御館ニ入ラシムル様取計フハ不都合ニ付貴殿等ヨリ諸隊ヲ引カスル様申通セラレ度ト答ヘタリ夫ヨリ自分等盡力ニテ脱隊ノ頭分ノ者ヲ仰德大明神ノ社前へ呼寄セ説諭シテ脱隊ヲ引取ラセタリ夫ヨリ赤川惣助ハ臂懸隊ノ長トナリ品川彌次郎ハ振武隊ノ長トナリ北川清助ハ遊撃隊ノ長トナリ其他某々各隊ノ長トナリ舊長官ハ萩へ参リタリ其内百姓一揆ハ益々ハケレク相成リタリ

第七十七條 其後銳武隊ハ俄カニ山口ヨリ柳井田

關門へ出張ス可キ旨達セラレタルニ付即刻柳井
田關門へ轉陣相成り自分ハ一先山口へ戻りタリ
其頃万事混雜ニテ百姓一揆鎮撫ノ為メ十六小隊
隊ノ兵下筋へ出張相成居りタリ然ルニ松原音三
曰ク右十六小隊ノ兵長府ノ兵ト相對レ居ルニ付
若シ兵端ヲ開ケハ宜シカラサルニ付自分ニ右兵
隊ヲ引取ラスル様説諭致シ呉レヨト申聞ケタレ
氏自分答テ曰ク足下ノ相談ニテハ不條理ナルニ
付君命ヲ奉レテ来ラハ自分盡カスヘシト申聞ケ
タリ夫ヨリ松原君命ヲ奉レ来リタルニ付自分山
口ヲ發シタリ

第七十八條 夫ヨリ自分柳井田關門ノ方へ参リタ
ル處長府ノ兵ト其節ハ長府ノ兵夜撃ヲカケタル由

ニテ一時關門破レタレ氏終ニ寄手敗走シタリ然
レ氏長府ノ兵猶近傍ニ居ルヲ以テ諫早七郎等夜
九ツ時頃来り自分ニ向ツテ長府ノ兵ヲ拒ミテハ
相濟マサルニ付是非隊兵ヲ引取ラセ呉レヨト申
聞ケタレ氏自分ヨリ君命ニアラサレハ不都合ナ
ルニ付君命ヲ帶ヒ来レ左スレハ自分ニ於テモ如
何様兵盡カスヘシト相答ヘタレハ其ノ如ク諫早
君命ヲ帶ヒ来リタルニ付自分大ニ盡力隊兵ヲ説
諭シテ遂ニ引取ラセタリ

第七十九條 自分ハ夫ヨリ山口へ入りシニ千人隊
ニ曳在ノ者ヨリ自分ニ向ヒ自分カヲ深ク諷シ
タル者アルニ付速ニ此場ヲ避クヘシト報レタル
者アリレニ付自分ニ於テモ然ラハ左様スヘシト

決心シ終ニ脱シタルナリ

第八十條 脱隊一條ニ付テハ兎角自分カ巨魁トナ
リテ万事指揮シタルノ様ニ御詰問アレヒ中々
自分カ巨魁トナリテ万事指揮セシ譯ニハアラス
成程軍用金ハ自分カ腰ニ帯ヒ居リタレヒ右ハ全
ク會計方ノ者ヨリ示談アリシニ付自分カ持テ居
リテ迄ノナリ

第八十一條 景初ウツギバタハ其ヲ出シ出張ノ其
ヲスクメタルハ全ク一時ノ權略ナリ然ルヲ右其
ヲ出シタルハ政府ノ其ヲ威迫シタルトノ御詰問
ニ付段々勘考スルニ其形跡ニ就テ論スレハ成程
宜シカラサルヲナレヒ自分カ其時ノ心持ヲニ於
テハ必竟戦争ニ相成リテハ宜シカラサルニ付何

卒レテ戦争ニナラヌ様致度ト一途ノ目的ヨリ為
シタルヲニテ毫モ惡心アリテナシタルヲニハア
ラサリレナリ

第八十二條 自分カウツギバタハ其ヲ出シタルハ
惡心ニアラサル證據ニハ其ヲ以テ御館ヲ固ヒタ
ル節自分ニ於テハ甚以テ宜シカラサルヲト存レ
白ヌテ候シ危難ノ場合ヲモ厭ハス大ニ盡力其隊
ヲ引取ラセタルヲモアリシナリ又柳井田関門ノ
其ヲ引取ラセタルモ自分カ説諭ニテ引取ラセタ
ルヲナリ何自分ハ自分カ心ニ問ヒタルニ自分
ニ於テ巨魁トナリシ廣ハ聊以テ之レ無キニ付自
分カ心事ハ篤ト御諒察下サレタシ

右ノ通相違無御坐候也 十二年四月廿九日

明治十二年三月廿八日午後申立

第八十三條 自分カ脱走シタルトニ付テハ今更申
譯相立タス併シ自分カ情實ハ當時ノ舊長官ナリ
シ岩佐清三郎村田右一郎三卷格之助等カ知り居
ルヘキニ付彼等ヲ御呼出ノ上御尋問アラハ自分
カ心事モ猶御了解アルヘクト存スルニ付何卒此
儀願ヒ奉ルナリ

第八十四條 先年松下鑿ノ者カ周布政之助ヲ刺サ
ントラ己ニ刺客ヲ松本橋迄遣シタルトアリタリ
其節自分考ニハ政府ノ人ヲ刺ス杯ハ國君ノ權柄
ヲ切ニ撓ムルトニテ甚以テ宜シカラスト存セシ
故自分終ニ刺客ヲ追跡シテ之ヲ差留メタルトア
リシナリ

第八十五條 自分山口ニ兵ノ居ルヤ否ヤヲ見ニ参
リタルトモ松原音三ニ頼マレ脱隊一同ノ者カ安
心セン為メニ参リタルナリ

第八十六條 自分カ脱走シタルトハ今日ニ至リ熟
考スレハ大ニ失錯セシト後悔致スナリ全隊脱走
セスシテ直テニ藩廳ヘ飛入り自分カ脱兵ニ關係
セシ情實ヲ申立ツルニ至リシナラハ繼令自分ハ
死スルトモ遺憾ナカリシナリ然ルニ自分カ脱走
セシ節ハ實ニ前後ノ思慮モナク只管土州ヘ走リ
客堂公ハ謁シ自分ノ心事ヲ陳述セン為メノミニ
テアリシナリ

第八十七條 長門守殿ヨリ舊長官所置ノ儀ニ付御
下問ノ節モ他ノ者ハ夫々刑名ヲ記シ差出シタレ

此自分ハ固ヨリ國君ノ權ヲ撓ムルヲハ欲セザリ
シニ付唯舊長官ノ名前ノミ記シ差出シタリ然レ
此舊長官ニハ罪ハアラサリシニ付自分ニ於テハ
舊長官ノ罰セラルルヲ望ミタルニハアラサリ
レナリ

第八十八條 御詰問ノ件々左ニ御答申上クヘシ

第一 景初六隊ノ兵力長官ノ命令ニモ從ハス擅
ニ脱セシトハ善キトト心得ルヤ又ハ惡キトト
心得ルヤ、旨御詰問ノ處右ハ惡シキト存スルナリ

第二 諸所ノ關門ニ脱隊ヨリ番兵ヲ置キシトハ
善キトト心得ルヤ又ハ惡キトト心得ルヤ、旨
御詰問ノ處右モ惡キトト存スルナリ

第三 自分カウツギバタニ兵ヲ出シ山口ノ兵ヲ

スクメタルハ即テ兵威ヲ張り山口藩ヲ却シ其
討手ノ兵ニ抗抵セシハ善キトト心得ルヤ又ハ
惡キトト心得ルヤ、旨御詰問ナレトモ右ハ其
節自分カ考ヘニ於テハ戰爭ニナリテハ宜シカ
ラサルニ付ナシラモ戰爭ニナラヌ様致スコソ
專一ト心得全ク一時ノ權畧ヲ以テ兵ヲ出シ夫
レカ為メ遂ニ其節ハ戰爭ニモナラサリシニ付
自分カ見込通り参リタルトト心得ルニ付此儀
ハ惡キトトハ心得サル旨申上ケシ處一時ノ權
畧ヲ以テ兵ヲ出シタル杯申立ルトイヘ兵抑兵
威ヲ以テ上ニ抵抗シタルハ下タル者ノ分ニ於
テ決シテ為スヘカラサル所業ナリトノ旨段々
御詰問ニ付篤ト勘考スレハ成程自分カウツギ

バタニ兵ヲ出シタルハ不宜所業ナリレト心得
キタリ

第四 長門守ヨリ舊長官所置ノ儀ニ付脱兵等ニ
下問相成タルハ必竟脱兵等カ動搖セシヨリ勢
止ムコトヲ得ス右下問ノ運ヒニ至ラシメシナ
ルガ右ハ善キコト心得ルカ又ハ惡キコト心得
ルヤノ旨御詰問ノ處成程惡キコト存スルナリ
第五 松原音三ヨリ足輕兵ハ山口ヲ去リタル故
最早討手トシテ差向クル兵ハ無之ニ付脱兵一
同安心ノ為メ山口ハ檢視ノ為自分ニ參ルヘシ
ト申聞ケレ様ノ次第ニ至ラシメシモ矢張脱兵
等カ暴動ヨリ生セレナルカ右ハ善キコト心
得ルヤ又ハ惡キコト心得ルヤノ旨御詰問ノ處

是亦惡キコト存スルナリ

第六 脱兵等カ山口ノ屋形ヲ三尺挾ミニ囲シテ
糧道ヲ絶テ且ツ人ノ出入ヲ禁シタルハ善キコ
ト心得ルヤ又ハ惡キコト心得ルヤノ旨御詰問
ノ處右ハ言語道斷惡キコトニテ最大罪ナリレト
存スルナリ

第七 自分カ銳武隊ノ會計方ヨリ軍用金ヲ受取
リ之ヲ帶ヒ居リレハ善キコト心得ルヤ又ハ惡
キコト心得ルヤノ旨御詰問ノ處成程惡キコトニ
テアリレト存スルナリ

第八 脱兵等打負ケレ後藩廳ニ謝罪ヲモセス自
分カ第一番ニ脱走セレハ善キコト心得ルヤ又
ハ惡キコト心得ルヤノ旨御詰問ノ處今日ニ至

リ考フレハ愚キヲニテアリシト存スルナリ

第八十九條 前條ノ如クハケ條ノ御詰問ニ付御答

致シタレハ右ハ先其大畧ニ付尚精細ノ情實ハ更

ニ申上度存スルニ付御聞承リ下サレ度願フナリ

右ノ通相違無御坐候也 十二年四月廿九日

明治十二年三月廿九日申立

第九十條 自分カ景初ウツギバタハ兵ヲ出レテ山

口ノ兵ヲスクメタルハ昨日モ御詰問ヲ受ケシ通

リ其形跡ニ付テハ甚宜レカラサルヲ存レ今更

悔悟シ居ルナリ左レトモ自分ノ心得ニ於テハ其

時戦争ニナリテハ忽チ山口ノ兵カ破レルヲエハ

何處迄モ戦争ニナラサルヤウ致度所存ヨリナシ

タルヲニテ決シテ愚意アリテナシタルヲニハ非

サリシナリ

第九十一條 其頃足輕隊ヲ引拂ハセルト云フ引

拂ハセスト云フニテ紛議アリシ節自分松原音三

瀧彌太郎ト謀リ其末毛利内匠カ山口ヨリ来リテ

諸隊ノ総督トナリタルヲアリシナリ

第九十二條 自分ハ脱兵ヲ指揮セシニハ非サレハ

現場隊中ニ在リシ上ハ謀畧ヲナシタルモ同様ノ

形跡ニ相當ルトノ御詰問ハ御尤ノ事ト存スルナ

リ併シ自分ハ脱隊ヲ宥メテ隊ヲ組直スト云カ當

時ノ主意ニテアリシナリ

第九十三條 三田尻ノ御茶屋ハ柏村某カ隨從シテ

長門守殿出張セラレ舊長官ノ所罰ヲ問ハレシ時

日ハ明治二年十二月中旬頃ト存スルナリ

右ノ通相違無御坐候也十二年四月廿九日

明治十二年三月三十一日午前申立

第九十四條 自分カウツギバタニ兵ヲ出シタルハ
政府ニ抵抗シタル様ナレバ全ク一時ノ權畧ニテ
自分ノ考ニテハ先戦争ニサヘナラスハ宜シクト
ノ見込ニテ不取敢兵ヲ出シタリシカ果シテ其節
ハ自分ノ見込通り戦争ニナラサクレ故先ニ宜シ
カリシト自ラ思ヒシ位ノ一ニ付其邊ノ情實ハ御
諒察ヲ願フナリ

第九十五條 小郡ノ關門夜襲ノ為メニ破ラレシキ
自分ハ逃ケレフナシ同所ノ關門ヲ破リシハ自分
カ為シタルヲナリ

第九十六條 ウツギバタニ兵ヲ出シタル一時ノ權

畧ハ最初ハ宜シカリシト思ヒタレバ段々御詰問
ヲ蒙リ反覆熟考スレハ惡キヲニテアリシト存ス
ルナリ

第九十七條 自分カ始終脱兵ヲ助ケシ様ニ御申聞
ケアレバ干城隊カ萩ヨリ山口ニ来リ御守衛ノ為
メニ御館ニ入ラントセシ節脱兵會議所ノ議論ニ
是非干城隊ヲ佐々波ニテ差拒ムヘシト云フナリ
シテ自分ハ素ヨリ干城隊ヲ拒ムハ宜シカラスト
存シ松原音三ニモ其旨ヲ申聞ケタリ

第九十八條 脱兵等カ小郡ノ農兵ヲ脱兵中ニ引入
レンフヲ欲シタルヲアリシ節自分ニ於テハ農兵
ヲ脱兵中ニ引入ラセテハ甚以テ宜シカラスト心
得タルニ付小郡ノ大庄屋方ヘ参リ農兵ヲ脱兵中

ニ引入レラレヌ様注意セヨト申聞ケレヲアリタ
リ

第九十九條 自分ハ始終脱兵中ニ居リタレモ何卒
シテ其巨魁等ヲハ取除ケ其他ノ者ヲハマトメテ
再ニ御用立様ニ周旋致度存念ニラアリシナリ

第百條 柳井田關門ヲ夜襲シタル兵ハ自分ニ於テ
ハ長府ノ兵トモ何レノ兵トモ知ラリシナリ

第百一條 自分ハ最初脱兵ニ要セラレシヨリ脱兵
中ニ加ハリタレハ脱兵ノ為メニ陷シイラレシ
様ノモノナリ其内ニ毛利内匠松原音三カ来リ脱
兵ヲ指揮シタリ

第百二條 山口ノ御館ノ迹所ヘ兵ヲ出シ三尺挟ミ
ニ囲ミタル兵ハ自分大ニ盡カレテ其兵ヲ引カシ

メタリ

第百三條 自分脱隊ノ軍用金ヲ腰ニ帶テ居リタレ
モ右金ヲ賞美トシテ人ニ遣ハシタルトハ一度モ
之レナク只賞美トシテ物ヲ人ニ與ヘシハ堅田大
和ノ家来カ主人ヲ援ヒタルトアリシ節右堅田ノ
家来ニ自分カ着レ居リシ羽織ヲ與ヘレノミナリ
然レモ自分カ軍用金ヲ脱隊ノ會計方ヨリ受取
テ持テ居リレハ甚タ宜シカラサルトニ相當リ今
更殘念至極ナリ

第百四條 脱兵等カ事ヲ為スニ自分ニハ一向知ラ
セス様ニテアリシナリ即テ御館ヘ兵ヲ出シ三尺
挟ミニ囲ミタル節杯モ自分ニ少シモ知ラセサリ
シナリ右ハ必竟自分ヲ疑ヒタルトナラント存ス

ルナリ

右ノ通相違無御坐候也。十二年四月廿九日

明治十二年三月三十一日午後申立

第百五條 自分ハ脱兵中ニ居リタレ其節自分カ大趣

意ハ何卒彼等^{脱兵}ヲ舊ニ復シテ御親兵ニ編制レ朝

廷ノ御用ニ相立様致度存念ニテアリテナリ

第百六條 自分カウツギバタハ兵ヲ出シタルハ失

錯ニテ宜レカラサリテナレ其節自分ハ山口ヨ

リ討手トシテ一中隊ノ兵ヲ差向ケルトノ由聞タ

レ其右ハ君命ヲ奉シタル討手ノ兵ニハアラサル

ハレト心得タリシニ付之ヲスクメタレ其山口政

府ニ抵抗スル儀トハ心得サリテナリ

第百七條 脱兵モ全ク叛逆スル心術ニテハアラサ

リシナレ其後追々奸惡ノ者加ハリシヨリ終ニ
惡キ所業ニ及ヒタリ自分カ考ヘニテハ佐々木祥
一郎カ脱隊ニ加ハリシヨリ以來惡キ舉動ニ相成
リシト存シタリ

第百八條 干城隊カ御守衛ノ為メ山口ニ来リタル
節モ脱兵ハ干城隊カ御館ニ入ルヲ拒ミ粗暴ナリ
シカ自分ニ於テハ脱兵カ干城隊ヲ拒ムハ宜シカ
ラスト存シ既ニ有福半右衛門ニモ面會シ干城隊
ハ御守衛ノ為メ来リタルモノナレハ御館ニ入
レル方宜シキ旨申談シタリ而シテ右ノ節脱兵ヲ
説諭シテ引取ラセ干城隊ヲシテ御館ニ入ルヲ
得セシメシハ不肖ナカラ自分カ盡力ニ由リテナ
リ

第百九條 舊長官カ萩ニ謹慎中長府へ脱シ兵ヲ募
リ己ニ途中ニテ足輕カ貳百人計リモ募リニ應シ
タル由自分其頃承リ妙ナルト存シ居リ處其
内小郡關門へ夜襲ヲ掛ケタリ右ハ如何ニモ粗暴
千萬ノトナリト自分ハ憤怒シタリ尤右夜襲ノ兵
ハ藩ノ内命ヲ奉セシ兵トハ少シモ心得サリハナ
リ若シ藩ノ内命ヲ奉セシ兵ト心得シナラハ外ニ
何トカ致シ方モアリシナラント存スルナリ

第百十條 自分最初六隊ヲ合併シテ一隊ト為スハ
紛亂ヲ生スルノ基ナルニ付決シテ宜シカラサル
旨申立タレヒ自分カ論ハ行ハレス夫ヨリ終ニ自
分カ見込ノ如ク果シテ紛亂ヲ生スルニ至レリ全
体自分カ申立シ如ク六隊ヲ合併シテ一隊トセス

御親兵ヲ編制スルニハ一先六隊ヲ解キ改メテ御
親兵ヲ編制セハ多クハ右ノ如キ大變ニハ至ラサ
リキト思ヒタリ

第百十一條 又自分カウツギバタニ兵ヲ出シ一時
ノ權畧ヲ行ヒタルヨリ兇災ヲ熾ニセシトノ様御
申聞ケナレヒ自分カ考ヘニテハ必シモ左様ニテ
ハアルマシト存スルナリ

第百十二條 自分ハ全ク上ニ叛クノ心ハアラサリ
シニ付脱兵等カ御館へ兵ヲ出シ三尺挾ミニ圍ミ
タル節モ自分ハ白刃ヲ冒シ盡力シテ脱兵ヲ引カ
セタリ又柳井田關門ニテ脱兵カ長府ノ兵ト對レ
タル節自分君命ヲ奉シ脱兵ヲ説諭シテ引カセタ
リ決シテ打破ラレテ引キタルニアラサルナリ

第百十三條 前條ノ事柄ニテモ自分カ脱兵ヲ煽動
セシニハアラサルヘキト云フコトハ御了解アルヘ
シト存スルナリ

第百十四條 柳井田關門ヘ兵ヲ出スヘシト命ノ下
リタルハ上ニ迫リタルヨリ起リタルコトニハアラ
ス全ク上ヨリ突然命セラレタルコトナリ右ハ自分
カ考ニハ最初脱兵ヲ一ケ所ニ取纏メタリシニ全
体脱兵ハ粗暴ニ付一同ニ差置キラハ又如何様ノ
コト仕出スモ計リ難キニ付銳武隊ヲ柳井田ヘ差
出サレシコトナラント存スルナリ

右ノ通相違無御坐候也 十二年四月廿九日

明治十二年四月四日申立

第百十五條 自分カ最初ウツギハタハ兵ヲ出セシ

コトハ宜シカラサレト爾後反覆考フルニ未タ何カ
心服セサルナリ右ハ自分カ一時ノ權畧ニラナシ
タルコトニラ決シラ兵士ヲ激動セシムル為メニア
ラス畢竟戦争ヲサセヌ様致度所存ニラナシタル
處果シテ自分カ考ノ通り戦争ニ至ラサリシナリ

第百十六條 脱兵等ヲレシウツギバタニラスクメ
シ兵ハ山口政府ノ兵トハ心得ス只山口ノ長官兵
カ何ニカ激シテ来タリシコト存シタルニ付今戰
争ヲナシテハ畢竟山口藩廳ヘ迷惑ヲ掛ケ相濟サ
ルコト見込即チ小隊ヲ出シラスクメタル次第ナ
リ併シ其節自分カ山口政府ノ兵ニラハアルマシ
クト存シタルハ全ク自分ノ過チニラアリシナリ
第百十七條 右ウツギバタハ兵ヲ出セシ節ハ最初

松岡周作一中隊ヲ率ヒ來ルト聞自ハ山口政府
ノ兵トハ心得ス且以為ラク是ハ兄弟喧嘩ト云如
キモノナリ萬一之レヲ其儘ニ棄置ケハ一中隊ノ
兵ト戦争ヲナスヘシ山口兵負ケルハ必定ナリ然
レハ付入ニナリテハ一大事ニ付是非取押ヘネバ
ナラスト因テ兵ヲ出シテスクメタルヲナリ
第百十八條 右ウツギバタハ兵ヲ出セシハ追々申
立ル通り決シテ謀反ノ意ニテナシタルニアラ
サレモ形跡ニ付テ御詰問ニ對シテハ一言ノ申
啓モナク自分大失策ト存スルナリ

第百十九條 自分當時ニ在ラハ專ラ藩廳ノ御為メ
ニナル様ニト存レナシタル事モ却テ謀反ノ所為
ニ陷ルハ甚残念ノ至リナリ左レトモウツギバタ

ハ兵ヲ出シ又其後山口ヲ脱走シテ各所ニ潜伏セ
シ形跡等ニ付テ御詰問ニ對シテハ何分申啓ナ
キヲナリ此上ハ何卒御斟酌ヲ以テ寛大ノ御處
分ヲ願度存スルナリ

右ノ通相違無御坐候也 十二年四月廿九日

太政官書記官議按

別紙司法省伺元山口藩士族富永有隣犯罪處分ノ儀
ハ左ノ通御指令可相成哉仰允裁候也 十二年六月廿
五日

司法省伺

元山口縣士族脱籍富永有隣特典ノ儀ニ付檢事杉本
芳照ヨリ別紙ノ通り具申有之候處該犯ハ舊惡ニ係
ル者ナルヲ以テ右具申ノ趣旨ハ相當ノ儀ト被存候
ニ付特別ノ御詮議ヲ以テ本罪ニ四等ヲ減シ禁獄三

年ニ處セラレ候様致度此段相同候也十二年六月廿三日

追テ尋常赦典ノ儀ハ裁判後伺出候手順ニ候ハ

該件ノ如キ國事犯ニ係ル處分ハ別ノ儀ニ付此段

モ併セラ上申候也

伺ノ趣特典ヲ以テ本罪ニ等ヲ減シ禁獄七年ニ處セ

ラレ候事 十二年七月三十一日

檢事具狀 司法省宛

元山口藩
士族脱籍

富永有隣

辛七年五月

右ハ明治二年ノ冬舊山口藩ニ於テ兵制改革ノ際有
隣儀藩知事ノ處分ニ悖リ切ニ諸隊ヲレテ其藩廳ヲ
圍ミ昭ント兇暴ヲ恣ニセント欲スルモ事遂ニ敗レ
脱走致シ爾來高知縣ニ潛匿セラレ明治十一年ノ秋

警視局於テ偵知拘拿シ明治十二年五月大審院ニ於

テ禁獄終身ニ擬斷セリ然ル處有隣ノ犯罪ハ明治二

年十二月藩制ノ時新律綱領ノ如キモ未タ御頒布以

前ニアツテ其縛ニ就キレハ明治十一年八月下旬ナ

リ茲ニ其歲月ヲ數フレハ既ニ十ヶ年ニ向ントスル

ノ星霜ヲ経過シタリ抑國事犯ニ係ル者ハ素ヨリ常

律ニ依リ論ス可カラスト雖モ以今之ヲ考レバ前陳

スル時態ノ沿革且年度ヲ歷タル儀ニ付舊惡減免ノ

比例モ有之旁特典ヲ以テ本罪ニ四等ヲ減シ禁獄三

年ニ被處度別紙口供并ニ擬律按ノ寫相添此段具稟

候也十二年五月 口供并擬律
按前ニ出テ故ニ畧ス

太政官書記官議按

別紙司法省伺元山口縣士族富永有隣特典減罪ノ儀

ハ本罪ニ二等ヲ減シ禁獄七年ニ處セラレバキ哉相
伺候也 十二年六月廿五日

十二年九月廿二日

茨城縣士族岩脇直吉ノ犯罪ヲ處断ス

司法省伺

別紙茨城縣士族岩脇直吉犯罪東京裁判所ニ於テ審
結ノ上見込ヲ付シ處分ノ儀申出候右ハ全所具申ノ
通處断可致哉此段相同候也 十二年九月十七日
伺ノ通 十二年九月廿二日

東京裁判所伺 司法省宛

談犯ノ所為タルヤ政治ノ顛廢甚タ慨嘆ニ堪ハサル
旨ヲ口實トシテ兩大臣ヲ殺害セント賊意ヲ起シ一
件天野芳太郎ハ相謀リ其後發覺捕縛セラレシヲ
偵知シ終ニ自首セリ右ハ明治十二年七月十三日御
指令相成候鹿児島縣士族二本忠作カ犯狀ト類似ス